

特43

58

兄譽片腕

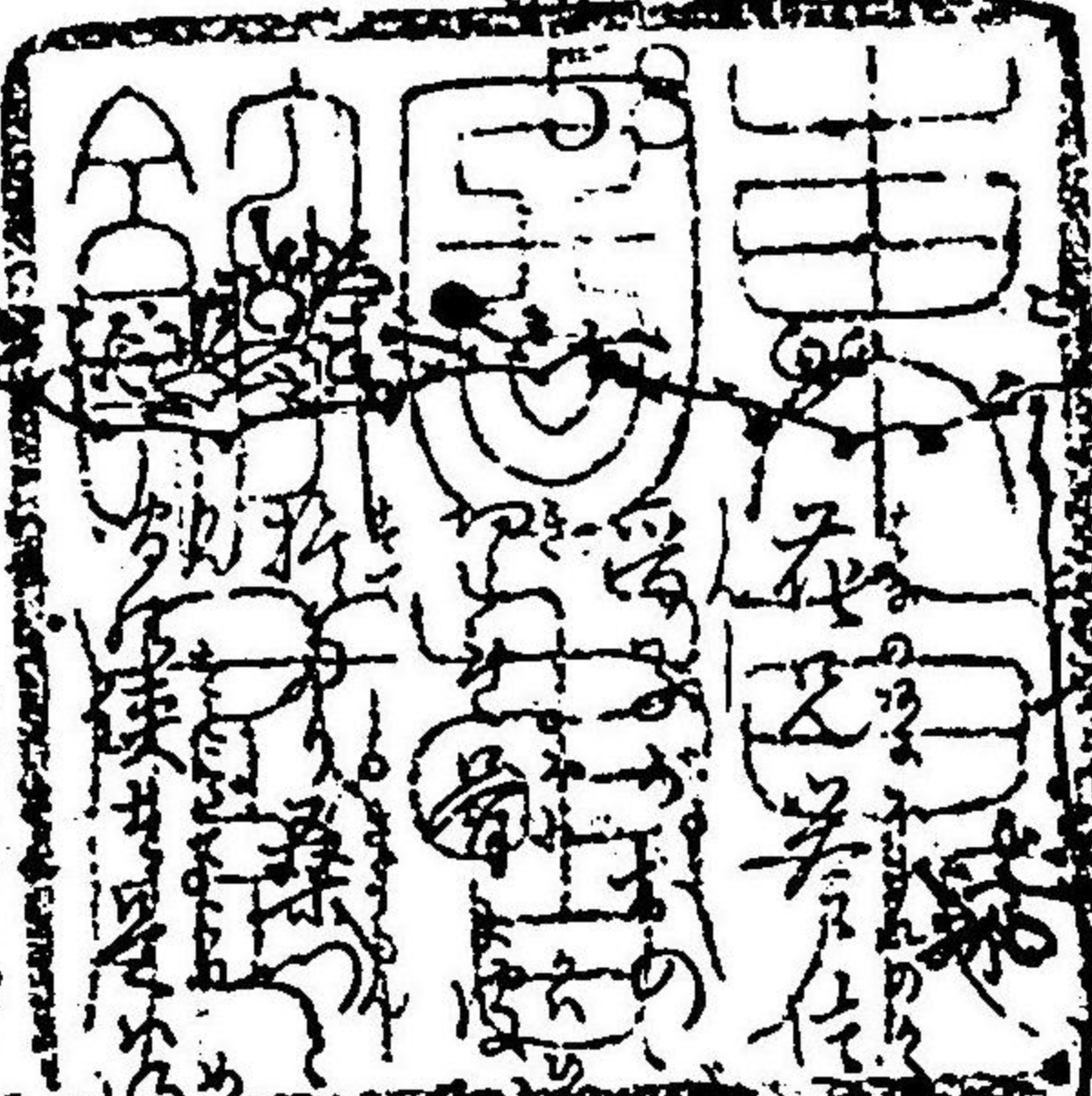
近世奇蹟考
載る所の
古圖を
寫り



種彦作
國梅畫

共隆社上梓





Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a preface or commentary. The text is dense and includes various characters and symbols.



柳亭桂子



花兄

與言片腕

柳亭桂子作

歌川國梅

版元

岩波社





鹿兒島縣士族 櫻井静

内藤新宿の娼妓
喜見樓の小豊



花兄譽片腕

○第一回

東都 柳亭種彦著

片腕に脈や通ひて梅の花と古人の名句を題し假用て爰に説出す一奇談の今を距る事廿余年
 万延元庚申の歳の春に起り引て明治の今日に局を結ぶ話の長は熊野路や紀伊の名所と噂も
 高き今來山の麓に住て代々今來と以て姓とする三九郎といふ農ありしが祖父三九郎の代よ
 り身代衰へ數ヶ所小持る田畑も残りなく賣代あし今の三九郎の代に至りては僅一人に雇ひ
 れて農業を務むる身となりしうば毎年雪の降る頃より春の畑打までの間の老も出て旅人の
 荷を負ひ或の商家小物を運ぶ車の繩を肩に懸け力の限り稼げども足ぬがちな夫婦の中
 男女二個の小兒あり兄は三郎とて今年九歳妹は雪とて安政五年の生れなれば今年三ツよ
 ど成にけるさるうらに三九郎が妻お波の細き活計を助けんと旦に星と頂きて籠り臨み眞
 人を稼ぎ出し這て夜の子刻を過る迄も麻を績やら糸車廻らぬ世帯に氣を揉てか胸の痛みの

年々重り芳延の春と迎へての殆ど危篤の容体なきとも親子四人の糊口さへ甚むづかしき貧家の悲しさ醫料の素より買薬さへ飲せ兼るを幼稚ながらに孝心深き三郎の口惜き事と思へども未だ九歳の疲腕も稼ぎも成ねば詮方なく父三九郎の街道へ日毎お出で旅人の荷物と脊負ふ手助けも一二世目の荷物と負ふて親の後に従ひつゝ走ると見聞く者ども其孝心と憐れで食物などを恵むもあまれば定めの外に賃銀を呉るも有ゆる三九郎の三郎の爲に望外の物を得る事さへあれは夫婦の頻喜びて三郎が働きの信々しきを賞しけり今日も又例の如く病を臥す妻も粥など與へ三九郎の三郎と連て往來お出で旅客と待しが晝過る頃四五人の小者を俱したる旅の武士の途中に於て求めたる國産なご三九郎も持せ路の傍らの懸茶屋まで寄り今朝より時候中りして胸痛の氣味ありしが今の一歩も歩行難しされども君公拜領の良薬を所持致せば之を服して一時はと眠る時の忽地に全快致すの必定なれば雲時休息致と問だ途中で雇ふた人足に價と取して暇を遣れとて三九郎に錢と渡し勞ひて歸されければ一々く是の有難ふござりますと包をば襟に置いて暇と告げ出茶屋の庭へ差出し

椽端近く遊びゐる三郎と唱て手と曳きたて「春といひへど未だ寒く盛がらゆる旅人も少ない此上待ても日暮近よ好い職業も有つくまいからサア早く家へ戻つて慈母の腰でも摩り看病をして遣のよい毎日大忙ふ太義だおト年端も行ぬ兒と勞ひ話し連つゝ我家近く來かゝる背後又聲あつて「ヤレ待て小僧の大盗人め其所動くもど馬りつゝ、駈來る者の最前の武士の連さる仲間あり

○第二二回

思ひも懸ず盗人と呼る聲に振向く間もさく青侍始め三人の仲間の三郎が襟のみ探り引据れば青侍の懷中お手を指入て月に鷹の繪をしたる印籠取り出し「儲もく憎い小童旦那様が椽端でお薬を召上つた其隙に奪掠たさ他は居合す者もあければ汝が所爲と必定思ひ追欠て來た甲斐のあるが幼少に似合ぬ太い頑童だサア元の場所へお戻つて所の法お行いせらからさりく歩行と用捨もなく懼て泣入る三郎と引立行は三九郎の呆れて何の言葉も出ず涙ながら後よつゝ如何なる事かと彼武士が休みし茶屋へお戻り仲間の袖に纏りて「我



兒あつらも愛相の盡た悪い奴の事なれば今更何と申譯の致しやうも御座りませねど何を
 ふても未だ明て九歳ある小兒の事如何又貧苦をさせざればとて他人の物を盗むといふ情
 さい事して呉ま一た地方の御法へ行かへせると仰しやる所の御尤もか詫のしやうもござり
 ませねと見れば如何やら大金の御品と思ふ御印籠などを其儘御まへ戻りましたら此頑童の
 御阿貴のうへ老爺へお引渡し遊ばして下さるやうも御供の貴君方達うら殿様へお執成を如
 何ぞお願ひ申すまそと泥手つとき平伏バ仲間等の端を噴め「盗人長々しいとやら貧苦に迫
 つて旅人の荷持とする兒が盗人なら親父も如何やら一ツ穴の貉り狸かまらぬ畜生でさへ兒
 を思ふて詫る所の最もだが此手際で二葉の間に對ねバ今五右衛門も此小僧の手下にな
 る程ゑらい大泥坊成り輩の事よ今のうち奇酷く懲して去さふ方が親の爲も成だらふと
 天囃さて聽入ぬを三九郎の両手を合せ「是此通り拜みまそ如何ぞお助けくど泣悲しめバ
 奥の間お休息し居る彼武士の三郎を若黨に椽端へ引据させ詞を和らげ膝を進め「コレコ
 レ小僧黙らぬり泣入ていての理の分らぬ見ればさつたり年齢も行ぬが幾歳に成て名の何と

いふ「ハイ九ツに成まして名の三郎と申すすと云ふ面を熟々見て「未だ九歳でい左も有ふ
 梨子地に鴈の高時繪銀の月の研出一の幼少の者の眼からも奇麗に思つた出来心お盜取た物
 てわらふ田舎者の心知るまいが是ハ手遊びなどでいなく殿様より拜領た藥入の印籠おれバ
 泣さんど夕持てるても不用の品でい有けれど他人の物を盗み取る其身の罪の輕くのさいぞ
 時宜に依てい小兒でも首と刻られさいとも云ねど今日ハ差免す是に懲て此以後とも悪い事
 と決して出さず親よ苦勞を懸さいぞと徐々諭せば三郎の涙に昏たる面振わげ「盗みと致し
 て顯のれハ首のないといふ事も又其品が印籠といふ事も存知ながら盗みましたの出来心
 でも懲ていさらくどござりません私しの爲めお印籠の不用な物で御座りますか中に遣入た
 お藥と出す間のなごよ其儘懐ろにして行ま一の重々恐入ました命をお助け下さいませ
 思召が有まそから私と此場で御手討に成れまして其中のお藥を胸の痛みで寝てゐる母に飲
 せて遣て母を助けて下さりましト云うけてソツト泣伏す孝心の面に溢れて憐あり

○第三二回

「ハテ異事と言ふ見だが借の汝の印籠が望みてのさく此中の薬がほしいと申のう」ハ
 先刻も伺ひますれば殿様とやらよも拜領の良いお薬ゆゑ胸の痛の直に治ると仰しやりました
 たが去年中うら私の母の胸痛で苦しむ事の彼方よ居ります親父もふ尋ねなされて御覽な
 さい其胸痛を治させ度ある貧苦て薬が買ませぬも悪い事とい知りながら旦那様の御印籠
 よ目の注たのが出来心私の命の惜みませぬから少々なりとも母も遣て下さりましとの詞
 を聞て武士の小膝を直と打ち「唐士の陸績が密柑を偷みし故事よの遙に優る汝が孝心藥の
 母に遣のすそ善い兒を持た三九郎とやら心配せずと爰へ来いと呼近づけて三郎が孝行を類
 に賞し懐中より金子十兩取出し「是の甚だ輕少だが其方が妻の療治の費用に孝子に爰て遣
 のすぞ拙者の薩州の藩士にて守村順太夫と申者だが拙者が老父の其以前剃髮致して淨居と
 信じ四國遍路の順拜より高野山へ參詣し紀州の名所を遺なく見物も出たる途中當地よ於て
 病に罹り死去して當年三年の忌日に付て暇願ひとさく墓參に上つたが賤る孝子も廻り
 合ふて聊かの物と思ひも亡父が追善功濟なれば遠慮なく受納致し妻の病氣を全快させて此

小憚が孝心を遂させて遣てくりやれ又此藥の當御家も古く傳へて軍中の用意とせる妙法に
 て西功丹と名付るあれは諸病に用ひて奇効あり疎かよせず服用させよと遣る方なき順太夫
 の厚き情に三九郎親子の夢うとばかり雀躍び「偷みを致した小僧の罪を御免し下さるのみ
 ならず得難いといふ妙藥と過分ある金を頂きましての相替せんと只願に辭するを強て受
 させければ始めの憎みし若黨も仲間共も三郎が孝も感じて紺綿服の袖を濡すを理りありさ
 ればころお波が病ひの島津家の秘方と聞て西功丹の効能と孝子が一念感通しけん遠の大病
 拭ふが如く忽地平愈よ及びければ親子の喜び譬ふるも物なく此一件を聞く者の彌々三郎が
 孝と賞し名を呼ぶ者も稀よして孝行息子と呼なしけり其孝行の顯はれしも順太夫が徳行よ
 出て療用の爲お恵まれたる金さへ看護の入費にの半額を餘すに至りければお波の是も日頃
 信じる觀世音の利益ありとて札所の殘らず廻らぬ迄も京の清水大津の三井寺大坂の天王寺
 なんといふ名高き近畿の靈塚を拜して病氣全快の賽をば陳さんと三郎と娘お雪が手を曳き
 紀州を出し元治元年七月中旬の事ありけり

○第四回

時ふ元治元年七月十九日長州は激徒禁闕を迫り一橋會津兩藩の兵と戦ひ闘ひ騒動に京都市中の者どもも右往左往は散亂し兵火を避て近在へ立退き洛中大半焦土と成し慘狀言語盡すべくもあらぬ此時しも今來三郎の未だ十三の小童なれば母と妹と従ひて清氷の觀音參詣の爲め二條通り堺町邊の旅館に一泊したりしが此頃の物騒がしき翌日よもわれ戦争の起もしぬべき風説あれは母のお波の頻に氣遣ひ觀音詣もろこくふ十九日の黎明に洛と發て歸らんとせし軍の寄るといふ間もなく大小砲の音とまじく兵燹四方に起りしかば此の何とせんと驚き愛ひ本年七ツのお雪と脊負ひ三郎が手を曳て旅館を走出しかど土地不案内あるらへふ周章狼狽走る洛中の人は押きて彼許道許と彷徨ふらち御池通りを寺町へ出る角めて向ふより擔ぎ來りし大葛籠の角めて面部をしたゝかに打たる機會も手ひゆるみて脊負のたりしお雪とバ地お落たるを抱上りと立寄る所へ見廻組の兵士數名の小銃引提げ勳也々々と馳來つて路を遮り三條の方へ破亂々々と走行くよと爰にも戦の起りしかと又立

騒ぐ人に壓れてお波のお雪を抱くも隙なく小半丁程押退らるれば孝心深き三郎の母は怪我とあらせしとて幼稚なむらふ力の限り人を押退け母と助け故の所へ立歸ればお雪の何れへ遁去し既にお影さへ見えざりければお波の周章大方ならず三郎共俱彼方此方と走廻りて捜せども善人の爲に救われしか悪人の爲に攫われしかいかいくれ姿の見えざれば狂氣の如く泣叫びて事と訴へんと思へども戦争騒ぎの中なれば採上らるべき所もなく彼は奔走する間も戦争の漸く鎮ましかせお雪の行衛の知るべくも知らねば其旅店より京都町奉行へ訴へ置きお波の一度三郎を伴ひ紀州へ歸て有し次第と夫三九郎に物語死を以て罪を購へんといへば三九郎のお波を宥め「今度京都の大變は付て娘一人の上でいなく立派な御方も討死したり或の妻子も別れたり家を焼けた者もわれ然いふ所へ出かけたを可哀さふだがお雪の災難と諦めて十九日を命日に跡懸るお吊ふがよし万一命お別條なければ觀音様の御利益で再會事があるかも知れぬば必ず愚痴と歎くなど泣伏す妻を慰めても慰め兼一身の幸なされ娘の行衛如何よぞと思ひ煩ふ氣の鬱悶より追々體の弱くありて明治の初めよ至りては家業

を大かた三郎に任せ魚釣をせして病身を養ひ折々農業と手傳ひたるが明治三年の秋ふ至り遂に虚しく成し時三郎の十九歳なれば佛事も残なく果し祖父の代より回らぬ迄も力と盡して身代を回復し一人の母も安心させんと頻に工風を凝しけり

○第五回

鶯鳳の卵のうちより其聲衆鳥も優るといふ諺も漏す三郎の幼年より親も孝ありて心忪削きのみならず成長も従ひて力飽まで剛くして朝夷三郎が總門と破り篠塚伊賀守の帆柱と抜く怪力に優らざるも村相撲をある時の七八人と相手として勝を取ざる事とて奇く堅きと碎き重きと負ひ忍耐力も勝れしがど母も仕ふる身なりければ力士あんの群みの入ぬと兄貴々々と稱されて遂に暗摩の仲裁に立入り又の水論なんぞを治めて富といふ程にのあふせも能き面役とありしかど謹慎深き三郎なれば賭博の更になさうけり去る故もこそ三郎の村内に名望ありて實直あるを深く賞され同所に名高き金満家の某氏とか云る者が一年大坂見物も妻子を供して出一時旅中の警備かたくと三郎と供も雇ひ泉州堺の濱までも久

しく遊びたる間だ同所津守の遊所へ三郎を誘引行て毎夜散財するうちに小政をかいは美説好き藝妓が最負よせられて其席へ屢々聘るゝ度毎も三郎とも必易く馴るゝも付て三郎の沈勇にして柔和あるうへ幼き時の孝行咄しを旦那の話も聞しかば男振さへ他より優れ片断で育ちし如くならず何處やら意氣を俠客風を慕はるれば又三郎も多き藝妓の其中は活潑な性質を愛るより互ひに想ふ戀の道に思案の外に出るより旦那が遊びに行ぬ日も三郎の唯一人津守の廓へ行と聞て彼金満家の大きき笑ひ旅宿も在て吾妻も對ひ「孝行者と評判されて柔順い彼三郎がよく」惚た女と見えて互ひも熱く成てゐるとの噂の已も聞込だが小政も惚た男の爲も足を洗つて田舎の不自由を厭はずも連添ふ氣なら三郎も最ふ年頃なれば僅ばかりの借金の己が濟して運て歸り母への旨く巳うら話して媒酌として遣たつた母も嘸かし歡ぶだらふと云バ女房も小膝とうち「然うして遣て下されば三郎も小政とやらも大悦びで今來れ母も安心をなませうら小政が行氣か行ぬ氣か吾儕から聞て見て本に嬉しい様子あら夫婦にしてお遣んさいと良夫の詞と賛成して或夜津守の廓近き料理屋へ小政と招き三

郎の方へ縁付度さ意ありやと問ければ花柳社会は住居ても改まりての耻かし氣又「此五六日馴染を重ねた三郎さんの事あれと優しい御方で親孝行の噂も聞て居ますから旦那様の思召て然う成ますから宜敷様にと喜ぶ氣色と夫と覺り三郎も得心させ小政が身は付く借財と旦那が拂ふ事として四五日がうち引祝ひの支度もそれく整ひけり

○第六回

却説 和泉國大鳥郡ある大平寺の所化に逸乗といふ者あり一の人に勝れし力あるゆへ僧の似氣なき腕立と好み酒色又耽りし其果に寺とも放逐せられ一う一時間徒の群に入し或人の周旋も因て同國岸和田の藩士より列し好める武藝をも學びしが放蕩恣情の行ひの性質よして止ざれば幾程もなく岡部家をも暇となりて流浪あり一堺湊に吟行來りて劍術の教場を開け名も逸平と改めて土地に若き者を集め疎豪の威風と廻かし弱き者をも脅迫して酒飲代ふする事さへ屢々あれば堺よりの厄神の如くに忌嫌するが此逸平も此程より津守の廓へ遊興して一度小政と見たりしより争で心に從ひせむと毎夜の如く來りての物は托け育よ

觸き五月蠅さ迄も挑めども小政の給けし性質にて坊主上りの起けき浮浪人と忌嫌へ尙疑を問に行通ひて小政の意を執んとするも此頃來りし紀州の客が俱に連たる三郎どかいふ男の爲に身を引くとの噂あるを惡漢仲間の門人より聞込たき逸平の焼るが如死胸の火を鉄めて熱々考ふるに「此頃より堺の濱に逗留してゐる大盡な身受もしかぬまいけれと其大盡の雇人高の知れたる土百姓の小政と引せるおんど、馬鹿々々しい評判だそんな話を忠告するも確な事を探索して囁言を吐とるなト笑ひながら家を出て又熟店の旗亭より小政を招きお遣らんとそれバ同家の女房が氣の毒さうお「寔は御生憎あれど小政さんの紀州の御客の三郎さんといふお方が身と引せて明日紀州へお立につけて今晚は其三郎さんバ小政の館へ假の録入り飲明一をあさるとやら夫故も四五日跡うら御座敷へお出ませぬと云ひとて眉も皺と寄せ「フウそんなら風説に違ひあへ供をして來た荷持とやらが小政を引せる金を出一たり一イエく其三郎さんの柔順いお方ゆゑ自身に女を引せる杯といふ事いおされませぬと御連なさを大盡の旦那が大そう鼠負よして諸入費と出して遣て女夫にさせて下さ

るどの事夫に付ても高足駄で首たけ惚つてゐる情人と添れる小政の喜びの察しやられて羨
しいと衆くの下女まで異口同音に小政の噂をさるふつけ逸平の妬さ限りもあければ直地に
其場を走出て今宵を假の舞入よ其三郎とくいふ奴が小政の館へ行といへば途中は待伏せ散
々に打懲した其趣句に容子に寄たら小政を攫ひ往來稀なる濱邊へ引出し日頃の想ひと晴さ
んと巧みて己の股肱と頼む門人共を語りひけと

○第七回

紀州の金満家某氏の三郎が實直あるを只願愛す所より小政が借金若干を出して三郎が妻を
させしが小政の當地を残りたる用向もあるべさうへ我々夫婦と同行して歸るも氣詰なるべ
しとて粹の上の粹と通し三郎を残し置て四五日中に小政の用を果し次第に連て來よとて妻
子を伴ひ三郎が先立て歸國しければ三郎の此上もなく恩を謝し三日ほど逗留せしむる大抵
用事も済たれば明日の小政を引連れて紀州へ趣く名残るれば祝酒とて小政が許にて強られた
る大醉に前後も知らず其席へ倒れて凡二時間程高麗に眠りしが咽の乾く目を覺し用戸と

明て天を仰ぎ「小政の未だ目が覺ないか東雲近く成て來たから薄暗けれども内を出て身支
度をなしければ専短かい秋の日も女連てい早くの若れぬ成べく丈の車を急がせ今日中よ且
那の方まで着度ものだ急立れば「アイ」直に起ますと洋燈の火影に化粧して支度を整
へる間に勝手の方よ小政の姉が朝餐の膳部取揃へ首途と祝ふ酒肴を又新しく調へて三郎
に進むるみぞ強ちふの固辭兼て敷を重ねる盃も前夜の酔と引出し足元も亂るゝ迄も酌し
たる三郎の「サア」支度が出来たらば御興入の御供と花笠と兼帯に出かけやうかと戯
れながら小政が手を探家と出て旅宿へ戻る路とがら此頃の西風積りに濱手の烈く吹荒て瀧
舟も出されバ隣近ければ寂寥と往來稀なる物蔭より現れ出たる一個の男が走來つて三郎よ
衝突よと見えたるが矢庭に三郎の胸を採て「ヤイ此野郎の夜明際に暗くもあいな往來を女
お眼でも暗むだか突當るとい何事だ堺の濱の漁師でい人よ知られた金太兄貴が往來の土百
姓に白痴よされて堪るものかヤイ」皆が爰へ來て此奴二個と擲きめせト呼ひる聲が合
圖にや群々と諸方より集り來る五人の漁夫が二個を中に取圍み「汝の方でい知るまいが此

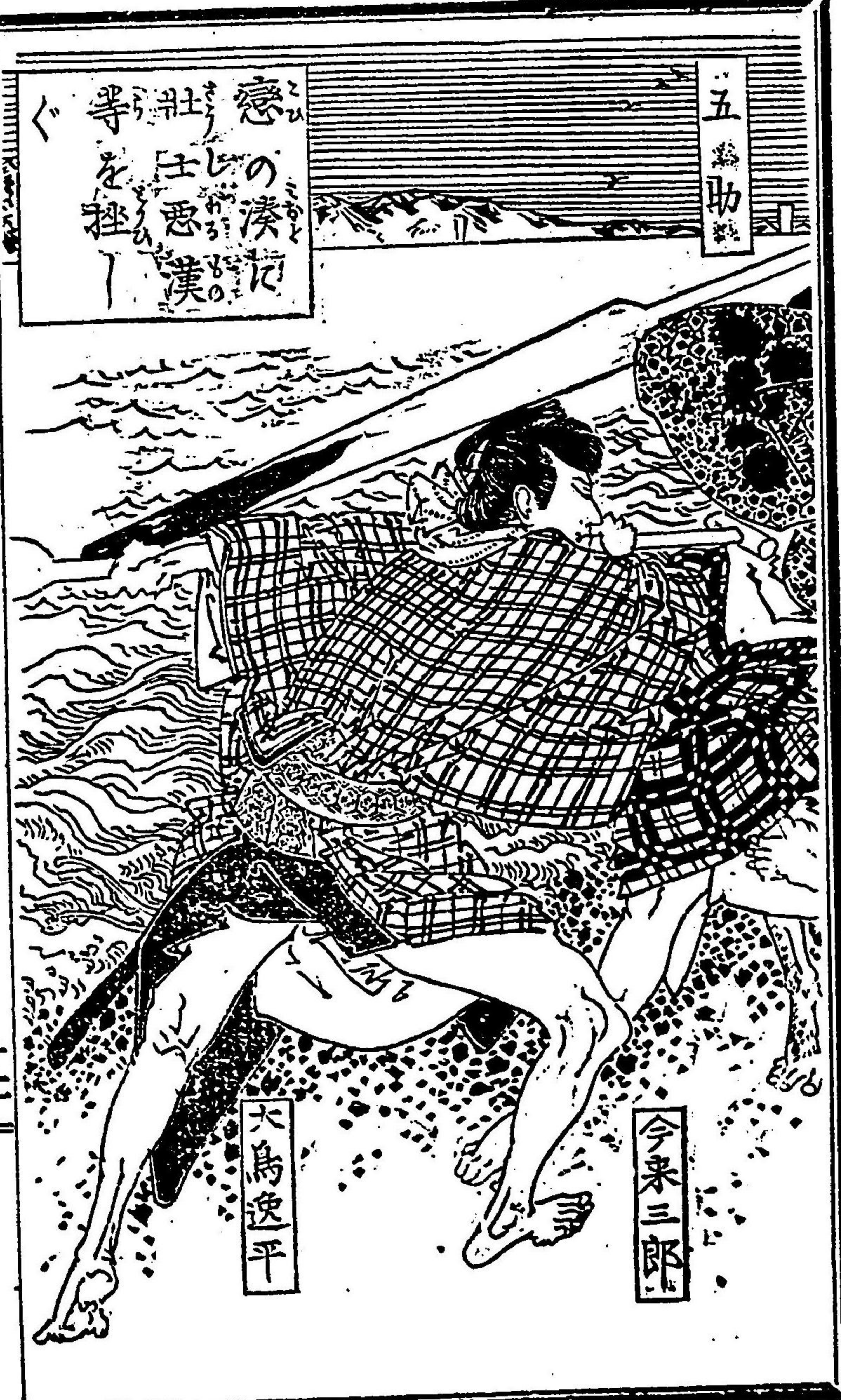


小舟

三太

五為助

戀の漢に
壯士の悪
等を挫く



今来三郎

大島渡平

頃津守の廓へ通ひ此小政と身受して紀州へ歸る花舞の味とやられて鼻の明た土人の我々
 の態とばかりの氷祝ひ山家育ちの兄さんに土左衛門といふ名を變て送つて遣らふと思ふの
 だも嘲ながら擲て懸れば「アレと驚く小政が手と採り背後に圍ふて莞爾笑ひ「往來中で突
 當つた喧嘩位の事あらば遠慮をして濟もしやうが此三郎が嫁取祝ひに海へ沈るといふから
 の深い意趣でもある事か小さな雑魚なら不知しらすを三郎といふ大魚が汝等の網に懸る者か
 と言せも敢ず一同ダ「エ、面倒を毆倒せと握拳の雨霰鼓ひ懸るを物ともせず右左に投倒す
 勢ひさながら金剛神の荒たる如き手練に怖れ多勢を憑みの漁夫等も「コレハ叶のぬ大先生
 早く加勢に出て下せエと皆口同音に呼られ「ヲ、と應へて往來の懸茶屋の葎の蔭より
 顯れ出し逸平の悠々と三郎が前に進むで來りける

○ 第 八 回

五人を相手は闘み合ふ勝負如何よと氣遣ひて後立添ふ小政の目疾く「ヤアおまへの逸平
 さん何しよ此處へと云せも散せ「ヲ、小政坊四五日逢ぬが紀州へ縁付く氷祝ひよ弟子の奴

等が行といふから若い者の後前見を怪我でも有てのよくないと附て來て容子を見れば舞と
 のが能い腕前ゆゑ敗て逃出す弟子の耻の師匠の己の面を係れば氣の毒なから相手も成ふと
 云つ、持たる木劍振あげ飛て懸れば三郎の身近居たる一個の漁夫の襟首掴ひて弓手に
 帯を捕へて前へ突出し打む込木太刀を受留れば逸平が打つ木劍の乾兒の眉間を打破り是の
 驚く隙を見て三郎の飛鳥の如く身を躍らして逸平が木刀持たる手を扭わけ拳と堅めて面
 部と目がけ續打に毆けをバ大力に擲擲まされて逸平の眩暈き後よ動と倒れけをバ五人の乾
 兒も憑み切たる師匠さへ叶のぬ敵し難しと思ひけむ皆散々よ遁去ると見向もやらせ三郎
 の奪ひ取たる木刀と逸平が前へ投出し「其方の祝儀が濟なら此方での望みもあひ喧嘩に
 ろらい間と入と是て祝儀の不足なら又大勢して何時でも來い今日の所り氣の毒なから怪我
 てもせぬうち御開きふした方がよりらうと嘲弄しつゝ悠然と塵と拂ふて小政を伴ひ「なん
 よも怖い事いさいサアく行ふと立去るを見る逸平の如ましと限りもあけれど最前の手並
 よ凝て倒れしまゝ明たる口と寒きもやらす見送る体ハ忠臣藏の伴内もどきで可笑かりしと

後々までも笑ひれたりとぞ斯て三郎の小政と共に旅宿を歸りて支度と整へ申す乗じて紀州へ歸り小政を旦那の許に置いて我家へ立戻り母の機嫌を問ければ前日話しれありしと見えて母のお波の顔も喜ひ「ヲ、三郎かよく歸つゝ夫も付ても今度のまア新田の旦那様が有るのうい思召で疾りも持せ度と思ふ嫁を運て戻つたさふも夫で私の大安心標致も氣づても善いといへば斯も嬉しい事あり翌日とも言せ今夜にも祝言をさせ度と心待をしてゐましたと大喜びよて早々小政をお政と呼更させ婚姻を整へけせば夫婦の間いふ迄もあくお政も良夫と見真似にて姑も孝を盡しけせば家族和合し睦ましく其翌歳の春に至りお政の男子を分娩ければ家内の悦びいふばかりもなく傳次と名づけて寵愛せしが此傳次が三歳の時明治十年の春よりして西南の事變起りしかば性來力業を好きて勇氣隆れし三郎の賊軍の爲も官兵の屢々利なき由を聞て腕と抜き齒と噛て憤怒に堪ざる景状ありしが徵募巡査に有志を召と警視の命令ありしかば既お妻子もある身あれば若戰場にて死する其老たる母も不自由もあければ國恩の爲も身を捨てても勢ひ熾の賊軍と拵て名と揚功を立んと留守をお政お打任せ戦

地と差て出立せしハ四月上旬の事なりとぞ

○第九回

西南の暴風一度起つて逆浪天を突くの勢ひある賊軍の猛威熾んにして官軍屢々利を失ひしが逆の順に勝つ事能はず熊本城を取圍みし木の葉田原坂の賊累破れて皆鹿兒島へ引退ぞ官軍の熊本城へ連絡と通じければ明治十年五月二日川路少將の別動隊第四旅團を率ひて堅志田より八代と越え陸路を薩摩へ入んとす該日又曾我少將も四大隊を率ひて熊本を發し鹿兒島へ征入らんとすお小政賊將西郷桐野等も勢ひ漸く衰へて日向地方へ落延たれば官軍の勇氣十倍して皆鹿兒島へ進入する折から今來三郎の別動隊の中に在て國恩と思ふ誠心より働死衆も優れければ至る所先懸して陥させといふ事あく三太郎時々の接戦に人なき境に入が如く目に餘る賊軍を確立々々進撃せしよぞ敵ハ一時お敗走して影だも見えす成しうハ今ハしも必見し一憩せんとて傍へある竹藪の中へ潜入り流るゝ氷の音を便し咽喉の濁りと酒さんと一丁ばりり溪間へ下り見れば身の丈より高く生茂りたる荆棘の中に何やら蠢く者の

筐の印
をす籠計
知恩計
は人ら

櫻井静



今来三郎

有に予携へるたりし小銃にて叢を掻分けよく見れば未だ年齢の十四五歳ある前髪の少年が
帷子の上と襷を絞どり袴の股立高く蹙げ白布を以て鉢巻とし割籠の骨柳と脊は負しの間で
も知らるゝ賊軍の少年隊の兵士と見ゆるが流丸は撃れけむ血の迷する踵を把へて憫む景状
を夫と見て頻に憐み思へども助くべき者あらざれば繩を懸て兵營へ引立行んと思ひにけれ
ば彼少年の襷を解き刀の提緒と結び合せ両手を掴むて背後の方へ廻さんとしたりければ彼
少年の身と起し溺めさなのらも三郎は切て懸るを身をかいし空を討して力と極の腰の邊を
踏と蹴れば蹴られて又もや後に倒るゝヤレまづ待て下さるべし魚手と負ふて動けぬ細打
て陣營へ引るゝ詮方なければ武士甲斐もなく生擒れては我名の汚れのみならず祖先の名
とも穢そよ似たれば獄中の苦を助け首打て陣中へ御持成さきて下されかし殺すも武士の情
あれば此儀と偏あお頼みやと云つゝ刀を投出し襟の後れ毛搔上て両手と合せ念佛を唱へる
覺期に三郎の潜然と涙を落し「天晴健氣か武士の覺期敵なのらも感心致した歩行も叶いぬ
身とあればお頼み任せ手に懸て三郎の功名とし跡懸るゝ吊ひやさん姓名と告げ言遣を事も

御座らば承まいらんと云ふ親切み若者の両手を突て頭とさげ「此期も及んで未練らしくや置くべき事もあけれど鹿兒島縣士族よて櫻井静とやもの今日討死致した由をお話一在此品と拙者の筐と思召し同縣士族に吾輩を知る者あらば唯一人の母の手許へ届くやう御取計ひ下さらば此上もなき御厚恩偏に願ひ奉ると云つゝ負たる包の中より取出す印籠の時繪の月に二羽の鷹「コレ」と驚く三郎が静の面を印籠とを見詰て零時茫然たり

○第十回

當下三郎の威儀を正し「櫻井静と名乗るるもど其容貌も何となく似てゐらるゝ様に思へば若や足下は御實父を守村順太夫との云れぬかと問れて静の不審さうよ「如何も拙者の守村の次男幼少の時叔母の家の櫻井の嗣子とありしを貴君の如何して御存知かど詰り問へば三郎の叢の上の両手をつた「ハ、順太夫様の御次男なるか知らぬ事として此印籠と拜見せぬハ恩人の實子と既に手に懸て身の功名に与る慮慮危ふひ所で有た拙者の紀州の百姓少の時順太夫様に厚い御恩と蒙りまゝと云へば静の點頭て「實家の亡父の教訓の引言よ

の毎度話した三九郎殿の御子息の三郎殿との貴殿の事か「仰せの通り三郎どの則ち拙者の事なきを實家の亡父と仰しやるからの順太夫様の何時れ頃か御病死された事を見えませ「順太夫の三年前は病死致して只今での吾輩の爲に實の兄守村春雄とやものが陸軍者小奉職致せば官軍中も居かぬ知れぬと吾輩の寄留も致さる當縣下も居しゆゑ西郷が説諭に従ひ畏多き事との知れぬ官軍も抗撃し今朝の敗軍も足を擧げて起るもあらま山の上より此草の中へ轉げ落しを折りよく足下に會し生前の喜びありと語るうち三郎の静が足の傷と視て腰を挿し手拭にて傷口を巻き手を採て「委しい話の後の事とし人目も悪らぬ其内に拙者が香負ふて参りませうから川路少將が陣營へ自首して降参なさませませそれバ細も懸らさず斯う敗懸つた賊軍も加いつてゐた迎も何の功も成ぬ事サア早くと勇りつゝ脊と差向て負んどそれバ「亡父が一端の恩義に報ひ降伏と進めて官軍の陣營まで吾輩を御運下さる思召の恭なふいごさきととも夫の意の私事表向の敵味方賊の手傷を介抱して脊負て行を官軍も見咎められたら三郎の二心だと疑われませう斯成果るも天運の極る所の詮方

なしイザ首打て御持参なさま「ア、是のあたり静かきや知ぬ問の兎も角も此身の命と母迄を
救はれた大恩人の命の何で取れませう照取ての目目も係る早くくと急立れば「然るに御
教諭お従ひ是迄の非を改めて今日降参致さふと三郎が肩に手を掛け涙々泣々立上を負れて
行んとする時一も飛來つゝる大砲の轟彈小三郎の右の腕と撃破られ「アツト叫びて倒れし
く平生豪氣の三郎あれ共撃れし所や悪かりけん起も上らま氣絶して其後の事い知ざりけり

○第十一回

櫻井静の是と見て已も深手を負たりし足を曳摺くして谷川へ下立て袴の裾を氷に浸し三郎
が口も絞込て「三郎どの」と聲を限りに叫生るを御に懸りて遠く聞し官軍の七八名忽地
溪間へ下來り敵が味方と介抱する容子と怪しみ子細を問へば静の既お傷を負ふて進退愛小
谷まりしもの川路君の本營へ降伏致す覺期あれば此人に陣營の位置を尋らうちに兼玉の爲
に氣絶せしもの降伏致せば今日より最早味方の事なれば介抱致す所なりと私事を匿して物
語れば官兵等の櫻井静の殊勝なる志しを賞し農家の雨戸を持來りて三郎と静と乗せ川路

少將の陣營へ擔持行きて三郎の假病院にて療用させ櫻井静の降参の由と一應尋問せし上よ
て其筋へ引渡しければ三郎静の其場より又散々別れける斯て三郎の假病院にて療用し手
を盡せども撃れ所や悪かりけん火藥の毒の皮肉に通じ殊に炎暑の候あれば其傷口より腐敗
して焔衝と起し來りしかば頗る難治の症なりとて戰地より大坂の軍事病院へ送致せられし
が時に坂地へ出張の軍醫監佐藤進先生の診察にて截斷せざれば一命も危ふからんと有しよ
因て終に先生が手術に罹り右の腕を截落し嬌み平素剛氣の三郎されば魔睡劑の類ひを用ひ
ず泰然として施療を受け腕の落るも及ぶ迄眉も皺めせむたりしハ關羽が華陀の治療を受ける
に自若として基を圍みぬたる勇氣にも譲らじとて大いお賞さきたりしとぞ斯てより三郎の
國手の診斷過ぎたず一時の危篤の症と成し重傷も日と遅て痛を減じ元氣を増し賊軍全く
消滅して凱歌を奏する九月の末にハ本復に及びしうハ故郷紀州へ立戻りしが右の腕と切た
るもる俠客の名にますく高く寛文年中江戸に於て名を得たる男達腕の喜三郎も優らむ
とて今喜三郎と稱するハ姓を今來といひ名を三郎といふふ因て今來三郎と其儘に異名の



如く呼ぶも此災難を遭ぬべき名詮自稱といふべき者か然れども不具の身と成ての働さ充
分あらざる故に三郎が母を波の故郷の武州多摩郡あるを以て軍功に因ての賞金と恩給金と
を合併し少しの田地を買求め江戸近在に遊べんと家族を卒ひて住馴し紀州を出て東京へ引
移りしより此地ふても又侠客の名を鳴し三郎といふ者のなく來三郎とを稱されたり

○第十二回

東京内藤新宿の甲州街道の咽喉にて青梅八王寺の兩道に分き旅客の往來絶えざるうへ堀の
内妙法寺に安置せる日蓮上人の往昔より靈驗利益灼然なるとして都鄙の參詣晝夜と分き往還
ふ土地の軒續き色を争ふ娼家の内は嬉見樓といふ大店あり其軒先の硝子燈の火影に照添ふ
色も艶深き桃と櫻を植込し中庭と隔ちたる奥二階の近江頃吉原よりして住替ふ此新宿へ移
し植らる驛第一は全盛と評判高き出稼娼妓小豊の部屋に居續けの客の東京日本橋區小網町
邊の或る銀行にて用ひも重き役員の大鳥といふ士族の果金の光りお招かれて席を賑はせ
間藝者離妓茶屋は僕婢も皆一様にさんざめく座敷の床前に縮緬の布圍を重ねて木魚の如く

大胡座でゐる富客の美味に倦しを察してや茶屋の女房が氣轉し利せ贈物として大井に山やど
積し燕豆は茹たを客の摘みあがら「一昨日の夜から飲續けて腹の中は波をうち口の魚肉よ
倦た所へ櫻も散ぬ春ながら此初物の有難い是で一盃過せるの工燕豆で酒飲しよトハ何と
旨い洒落であらふか」成ほど是は大鳥さんの御名洒落に先陣と越され營業人の辨問がト
マ後れを取ましたと笑へば藝妓のお清が差出て「先陣をされて後れを取たら旦那が佐々木
へ参じますと御乗越しなすつたのだらふ」イヤ重ねく大閉口だト遊るを押へて大勢が「
サア」降参の印として此大器で二三盃續けてお飲と無理強に口へ次込む殺風景明もわ
れバ舞ふもありて鳴も止ざる大騒ぎの最中に操類の障子を明て入来る大鳥の務める銀行
の庫番の甚太郎恭々しく両手をつき「大ろうお早ふ午前かこの景氣は大愉快でござりま
そる夫よ引かへ吾輩の昨晚どうく夜明して調べものぞ致しませう御用の所へ調へまいた
先其慰勞に大なる物で頂戴が肝腎だと續けて飲バ大鳥が「夫の大さよ御苦勞々々序よ小豊
の欲がつた馬喰町壹丁目本家の平尾の小町水や小町白粉も持て來たか」ろこの所お落途

のなく二階中へ物花を出し程買て参りましたが其望人の小豊さんの何故此席にお出がないか大將も征つけられて未だ御目覺が有ませんかと聞へ小豊の仕女お房の「イエー」然で有ません小豊さん大鳥さんが御目覺れないうちに今日の十三日の御縁日のお堀の内の日蓮さまへ鳥渡参詣して来るとして類も直さ車を急ぐせお参りよお出だうら願てお歸りなされませうと云へ藝妓の座と籍ひ「小豊さんの御信心よの實に感心致まますと定めし願ひの大鳥さんの權的にても成て且お側にゐたいとか何とかいふ一件で有まいうと打笑へ「イヨ好男子よ何なる是の旦那大齋齋で一同へ體でも御馳走が有ませうと頼ぐ太鼓の音衰しき晝の世界の吉原も驛場も同じ光景おて賑やかながら寂實がちなり

○第十三回

日蓮宗を信心の太鼓の音と諸共にどん／＼榮える信樂とて妙法寺の御堂の際に有るる割烹店あり其前裁を隔たりたる六疊の小座敷お士族の果かと思へる廿一二の若き男が酒肴など誂へおき人待顔に手枕して家婢に時刻など問ふ間に庭に車と挽込せ駈入る者新宿の

嬉見樓に出嫁する娼妓の小豊が息と切て「無か待遠であらふと思つて早く出懸る積りて有るが思ひなしの大鳥さんが昨夜も三時過るまで一睡ともせず飲積けのお新造業や若い衆までも朝寐として垢が明き約束の刻限が大方遅く成つたから腹でもお立てゝあいかど大さよ心配してゐたよと据りおの／＼陶盃をとり「アヤ／＼貴郎の未だ一盃も始めあいて吾儕の來るのを待てゐてお呉か二本に優しい性質だねエト微笑ながら飯を摘み髪の後れ毛搔上る其婢娟さの繕いぬ所お却て趣さある全盛ところ知られたり男も莞爾笑ひながら「末の女夫と言かひしたれと親さ中おも禮義ありて肝腎は金主が來ないうち手を出しての濟ないから滅ぬいた腹の虫を撫て辛防をしてゐたのさ「オヤ／＼如何も堅過て氣の詰るやうな口上だねと戯れるが陶斗と採合ふ端に帯も挟みし帛包の中よりして五圓の紙幣と三枚出し小豊の男の手お渡して「兄さんの御病氣が危篤のお話したから何か見舞を上りたいと思ふてゐるけれど貴郎も是迄吾儕もあふん斯う話さない身と成果て吾儕も北里よいた時から貴郎故にの借金の淵へはまつて新宿へ庫替に來た程だから無々招で遇たいよも人目の憚る



紙幣のなし質も難澁至極といふ此場合ゆる大鳥さんと欺して漸く五十圓更衣の手傳ひをし
 て貰ふた其中で拾五圓ての寡者からふがマアく是を取て置て當分の所を渡ぎ御病人の好
 た物でも買て上て着病を怠らすよしてお上ささいよ其間に又吾儕は如何なる法の付やう
 にして樓主へもお茶屋へも渡りを付て表向きの御客の櫻井さんふして立派に座敷へ上れる
 やうにする積りだから氣を落さきに待てておくれよ、眞實の咄しに破亂々々と落る涙を
 濡絆の袖に拭ふ目元の薄紅の雨に潤ふ海棠の花重氣ある風情なり男の札を頂いて溜息を
 つき胸を摩り「今に始めぬ貴嬢の深切吾輩一人の事のみあらざ大病故に陸軍と酔して昨今
 の活計も困難窮まる實の兄の藥代まで惠まれてい寔に濟ぬ理なご差當つて相談をする
 べき相手もない故に辞退もせざる借用するが丈夫と生れた甲斐もあく兄の事まで娼妓の世
 話も成との何たる意苦地なし是を思へば十年の戦争の傷で死だから武士らしい名も残らふ
 に我身ながらも愛相の盡た白痴に成たと男泣小雲時涙よむせびけり

○第十四回

小豊も情郎が苦情を慰め兼ね膳れ上り置たる陶斗とり上て一人の七轉び八起とやら然きなきを想はずと憂ひを拂ふ酒を過し心と大きくか持なら又世話とせる者も有て官員小でも撰抜の時鹿兒島縣士族櫻井静と立派な表札でも出して人の尊敬をするやうに成まい者でも無てのさいうエ何事も氣小懸さいでマア御酒をたたと御給と進める毎小豊もまた取換せて引受々々飲む朝酒に酔の廻りて睡ることもなく疊の上にて轉て零時休しが靜の顔て身と起し「ヲ、思ひ掛けなく時と選した此日影で十二時が少し過たに相違のさいヲ小豊さん眼と覺して寸刻も早く行きたいと大鳥さんのお白眼と頂戴せせの成まいせサアく迅くと急立られて不性無稱に起上り解たる帯と直し「そんなら吾儕の歸ますが何やかや未だ種々言殘し事だらけなれば廿五日に近所まで又逢に來てお呉であいか「川の有る何時でも行もーやうが近所といふの「サア二十五日の平川の天神様の日とかこつけて又御参りとやらかすから伊賀町の鞭の湯で眺望の好い座敷を借て何でも貴郎の好きなものを眺めて待てゐておくは十時過うら十一時の間よは是非吾儕も行て緩々と登御膳を一所に給やう

でないかといふへ静の點頭で「鞭の湯さらば吾輩の方か近さも近し景色もよし都合が好かす間違ひなく先へ行て待てゐるから人に曉られないやうに随分速く出うけなよと約束固めて會計も小豊の懐より拂ひ車を急がせ立出れば静も門を一ツに出て「噫合乘で行たいが人目が有から吾輩の是ら舎兄の病氣全快の爲に妙法寺小参詣して道を異て行ませう「そんなら廿五日よは急度四ッ谷の鞭の湯へ「ヲ、承知だよと袂と分ち右と左に分き午後二時近頃なりけり却て説く大鳥大盡の婿見樓は大勢の藝妓を聘で小豊が歸り待ども遅きを鬱悶て我が腹心の甚太郎も何やら叫き去しめたる後小豊も歸來りけり其夜の婿見樓は臥し翌朝市谷柳町の家小歸りて腹直しの迎へ酒を飲む所へ入來りたる甚太郎の酒の相手を一ながら「昨日巨魁が嫉妬の心配を察する所は是の必定小豊めに情夫が有なと睥睨だらう用が有る振として先へ座を立信樂へ出かけて小豊に知れぬやうに隣座敷へ飛込で逐一容子を聞て見ると鹿兒島縣の喧嘩め士族の櫻井静とかいふ奴が古い馴染の間夫と見えて種々話しの間よは笑つたり泣たりして又今月の廿五日は伊賀町の温泉で話とを

といふ事だの夫も付ても遺傳のい其那郎めに十五圓巨魁の手から要求た中を渡して見次ぐ
容子で有たが如何も唯獲る札だどて鹿末もパツ／＼と遣れての骨折甲斐のないていあいか
と思ひを聲の高くなる口と壓へて大鳥が「コレ密と物を言ぬエかと四邊へ心と配れるの暗
き渡世と知らきたり

○第十五回

黒かりし駒も勞る、山吹の言ぬ色ころ苦しかりけきとい龜山殿七百首の中に有忠卿が詠れ
一歌にて馬も寄る戀といふ題も因もあるや鞭の湯の二階に語らふ静と小豊の言ぬ色ある山
吹の金の工面も意の駒も勞る、愛と温泉に流し清めて浴衣の儘に静の二階へ上り來り「汗
を流して快い心持も成て來たりらモウ一盃飲で午餐にしませうと云あがら何心なく二階の
椽の欄干から下へ降りし手拭の氷の垂しと下座敷より「ヤイ／＼何としやアがるのだト云
れて愕然必づき」是は寔に不調法眞平御免といふ間もかく四人等しく勳也々々と二階へ上
り來る中に大鳥の刺肉の皿を手も持るるを見て小豊の驚き避んとするを斜眼に視て兇刺と

笑ひ「何も驚く事いあ大鳥も客あれば此青兒才も客やら問夫や仔細と知らねど色戀の
話しと違つて濟されないの同銀行の下役どもを三人誘引て今朝から飲てる座敷の椽先肌
と拭つた穩い水を僕が喰ふととる肴へ刺込せたい失敬千万他の者なら誤り入せて免せまい
者でもないが是が小豊の合客での遺傳でも有て一と事か怨が有なら相手も成ふと云ば静の
両手を突き「下小貴君がれいでの事さへ存知ませぬ程なれと御目も悪るも今が初めて何で
怨の遺傳のと云事のござりませう全くの不調法如何ぞ御免し下されと云バ小豊も詞を添へ
「此静さんの吉原に居た頃の御客さんで此新宿へ來てからの打絶ておましたのが今日計らま
も平川の天神様で御目も悪り久し振て新宿へも行度けきと急ぎの道ゆる近所で一杯飲ない
うと誘引れて來ましたが大鳥さんどの知らない中何で怨が有ませう汚れ／＼肴の換させて香
儂も一所もお詫をするうら如何ぞ此儘免して上てと涙ながらに詫入バ大鳥の爲有顔に「汚
れた肴の換られやうが食物へ水をかけられ汚れ／＼面ハ此儘も取換る事も出來ねバ氣の毒な
から此青兒才と存分踏たり蹴たりして體も利ぬ程に成たら賢情を吹て誤るだらふ其時又

勘辨をして見やうよと天嘯き平に詫入る静が手を採り引起して面を掲させ「見え見程
瀧は障る小生つ白い野郎だと飽迄に嘲弄し小豊が詞も聞入らず一度又懸つて撃んとすれを最
う是迄と覺期の静と遠い意地ある士族の果先と云なば四人を相手に死ても恥辱を受まじと
見續ひして扣へる「エ、面倒か殿殺と四人が上る拳の下と潜つて働く櫻井に怪我あら
せと泣叫びて彼方這方と支る小豊と「妨げするやと大鳥が蹴倒しなごう飛懸り静と擒へ
て紐伏れば大力を挫しがれ身動きあらず口惜さ切齒をあしてぞむたりける

○第十六回

大力量の大鳥も乗懸られて動かれぬ静を擒へて甚太郎始め三人の腕の續く限り殿んど脱ひ
懸る折うら後の襖を颯と明て走出たる大男が左の腕を伸せと見えしが大鳥が襟上掴むて一
間餘り投出せば甚太郎と外二箇の此体を視て羨みながらも打倒さんと立懸りしが投出され
たる大鳥も此時等しく面と見て「コレハ叶いぬ大變な野郎が愛へ出て来たぞ云つゝ四人が
狐鼠々々と後をも見せりて遁去たり静も此時起直り面見合して「ヤア此方ハトいふと押へ

て眼面ぞ知らせ「イヤ、何の知己でもかい人の上なれど差違つての御難儀と察した故よ
お救ひ申た何の兎もあれ此女の商賈者の様子なきに先へ車でお歸しおされ跡に遺つて後々
と初めてお目も懸りましたお話しをまませうと云へ静も夫と察し「仰の通り此女の出稼人
の事あれば長留をして置いての長きサア、小豊此方来て下されたら千人力何も心配
するに及ばぬ早く歸つて此事の沙汰ありまして置なと小豊を躊躇して立戻り思ひづけあい
三郎の如何して此場へと訝かれバ「鹿兒島の戦地にて計らずも御目に懸り降参をお進め
申て脊負て行ふとした折から毒弾に腕を撃れ氣絶した儘病院へ搬入られて治療を受け正氣
よ成て貴君の事と尋ねましまし、参謀の本營へ送らるたとばかりにて其後諸方を聞合すれバ
東京へ護送とあり國事犯の處刑と受け頓て赦罪ふ成たと聞ど病院に在て療養中ゆゑ委しい
事も聞ませず吾輩も亦御覽の通り片腕截て療人となり何も出来ぬバ據るなく母の故郷の東
京近在多摩川邊へ寄留して貴君の今の御所在を逢ふ人毎に尋ね最中先々御無事なと面と見
て安心とましまし、と云へ静も威儀を正し「吾輩も其折に官軍の本營より追々に東京へ送ら



来三郎

小こよ
志しん
か



甚太郎

兔平

御所舞片脚

れて禁錮と成りが幾程もあく免されて赤坂一ツ木に住む實の兄守村春雄の宅へ同居し身の
立方を考へ中お愧かしい事あら友人の進め依て吉原の大文字屋へ一度行たが鎖切
ぬ中と成たの今歸らせ嬉見樓の小豊も身を持崩し差料の雙刀さへ買拂ふはと痴情
を盡した折から兄が大病ふて體も利ねバ務もあら辞職しての困窮を小豊が爲に幾度も救
はれた事もあれバ今日も今日とて相談に此湯で會ふと何所て聞たか彼大鳥どういふ客が大
勢と語らふて半殺しにまやうとしたを折よく貴君に救はれました實に面目ない所で御目
も懸つて恐れ入たが片腕を落しても御別條なく強勇の先何よりも喜ばしいと互ひあつる
過去話しの思ひ掛けざる再會あり

○第十七回

櫻井静と今来三郎の積る話を聞よつて互ひに嗟嘆するのみ成し今来三郎の威儀を正し
何國の士族も官途に就ねバ困窮するが多けれとれ舎兄さん御大病の療治代まで女の爲に
見次がれるとい私我無け左程迄も成果るとい御心のらとい云ふのら士族の恥辱といこと

りませんり最初うら此女の確に娼妓と見認めた故御爲も成ぬと思ひまして怒いに來三郎が
知己と云ぬ方が貴君の爲に后見がまよいと想つて追跡してから段々の事を伺へバ深切な者
ていあれと御出世前の大事の體を娼妓なんぞと迷つてい御先祖様へも濟まそまいア何事
も來三郎よれ任せなされて是からの娼妓狂ひを思ひ切何か勉強さりますし不及ながら來三
郎が斯う御目も懸つたから前年の御恩報じに何か一骨折ませうといへバ静の取入て「親
戚も及ばぬ御異見の重々恐入たれバ小豊の方へも不實意なく順序をつけて遠ざかり御世話
も成て何ありとも勉強を致さふの差當つて不審なの今に悪漢大鳥始め三人が貴兄を見る
と物も言まに遁出したの御存知の中でござりますうと問ハ笑ふて頭を掻た「ア夫に付て
可咲い話しの女は迷ふの御爲に成ぬと御異見をした舌の根の乾かぬ先に斯な事言憎けれ
と彼奴等の吾輩が泉州の津守の廓へ遊んだ時今の判妻のお政が未だ遊妓であるお不斗剛樂
だと或る金満家が戯らかたくお政と引して來三郎の女房にして呉た時に今爰もた選平
といふ奴が羨むで乾兒を大勢語らつてれ政を櫻井に來た時と單身ながら彼奴等を懲らせ

て遣まされたが彼逸平の泉州の大鳥郡の生れも自ら大鳥逸平と名乗て劍術遣ひの落破戸で云バ盗人同様の巨魁と稱る、奴で有たが何を家業小東京へ何時頃出かけて来まいたか兼ての手並ふ懲たも手向ひもせず逃出したの大笑ひでござりまし、云バ靜の小膝をうち「夫て怖れて一同が遁去た譯の分りま、小豊が話し聞く所での彼大鳥の銀行の支配人だとの云ひまその力の大そう有る處から言葉遣ひの鄙しい容子が支配人との思ひをませぬ「銀行の人など、以外の外の虚言八百衆くの乾兒の悪漢を連れて来てゐる所と見れば何でも怪しい彼奴の舉動を其うち詮議して敵討い苛酷い目に遭せて遣たい者されど貴君に怪我もないければ夫も餘計な詮議といふもの何の兎もあれ只今から一ツ木の御舎兄さんの在宅までれ供を致して今日計らま此湯場へ御目に懸つた事かとして御亡父様の御恩と慕りまし、御禮と陳に参りませうと同行して病ひを尋に趣きけり

○第十八回

粵に又神奈川縣下武藏國多摩郡溝の口といふ所は氷狗半二と異名せらる、博徒の老人あり

けるが若かりし頃より氷狗の名ある他人の子弟は賭博と勤め不長道より追々お深淵へ引入る、が故ありとぞ加之あらま此半二の遠國へ赴きて容貌宜き少女を拐賣なせ、たる悪露の發露お及びて此程終身懲役の處刑に遭たる其跡に遠る俸の十三歳にて万吉と呼せしが万吉の母は數年來持病の瘵を惱みたるを半二が擔はれたりより歎きの爲お重症とあり三年餘り床よ就て万吉が十五歳の秋終に虚く成ければ万吉の孤子を成て活計の道も立おたさうへお父半二の悪業と近村迄も憎みおたれ親の因果が子に報ふ譬の如く何方よても罪なき万吉までと憎みて奉公口を需むれど雇いんといふ者もなく窮するを救ふ人もなければ玉川に出で雑魚を漁り市に鬻ぎて漸々に獨身を過すばありなるも父が悪事の結果といへ最も惘然べ死者なり頃しも秋の彼岸過天晴朗も氷も澄時を得顔も草花の咲亂れたる絶景も常お目馴し愛身よの面白からねど濫觔の下ると獲んど万吉の綱と下して若干の獲物お心喜悅びつ、立歸らんとする所へ來か、りたる隣村の博徒の安藏が夫を見るより走寄「万吉、万吉か久しく會ぬ無沙汰をさるおも程が有う又繰返していうでもないお汝の母が死だとき葬禮

も出せません。村中で憎まると親父のふ蔭で棺一つ買ふ錢さへも貸て呉る人のないのを類に歎いて親父の賭場の黨の好意で如何ぞ五圓貸て呉ると一粒の錢もさそう玉の涙を溢して泣付て来たと思ひ少一間の良い時だうら貸て遣たら其後一圓宛の三度も運び後の毎月廿錢づゝ急度返すと汝の口から言たが最後其後に二三度の受取たが残り一圓半やとの兎角は不漁で困るから獲物さへ有らば収纏めて持て上ると度々の催促を尻とも思ひを不沙汰に過るも程が有る難儀を見懸て助けて遣た浮屠心の安藏もモウ三度目の焰魔而今日の獲物と番ぐるみ十分一の貸の抵當は春貸て行ふと万吉が提たる番は手と掛れを「ア、申安藏さん他の負債とは譯が違つて母を見送る柩を買た恩金の事なれば有さへそれば御無沙汰よお返し申さぬ筈なけれど借たの貴君のみさらを御醫者様の藥禮から親父が入申の差入ものまで重ねくの雜費と彼許這許へ手を合せお借申た方々様へ御無沙汰と致しましての親父お能くよて人情も思も知らない小僧だと親の汚名と出し度なふは是此通りに獲ました魚の錢も半分過借借金へ向けますもへ此秋風の冷たいに吾儕のまご肩の出た破れ襦袢一枚

の外おの着換もない始末爰の所をお察し成されてモウ五六日御宿豫と如何ぞお願ひ申します今此魚を上ましての今日の御膳も喰られませぬ慈悲を情を恕してと河原お手と突騰躍り番を抱へて泣居たり

○第十九回

安藏の冷笑ひ「モウ五六日の御宿豫も度々て耳に腫が入た諸方に借が有ふとも有まいと己の知らぬ持ねエ金を取ふと云なふ比丘尼は墨丸出せといふ難題でも有ふけれど獲た魚を渡せといふに困つた時の恩を知らぬ渡されたいといふ理の有まい「其仰せの「一々お御最もでいござりますれど「最もあらは渡してしまへ強て拒めば此小僧一條繩でい行ぬ奴だ安藏が腕づくで攫つて行いど万吉が持たる番を奪へんとするを遣らじと歎きて争ふを最初よりして此岸お釣を垂て聞たる男の竿と傍は置き二人が仲に立入て「余の近年登戸邊へ遠方より來た片腕の來三郎と云ふ者だの深い様子に知らまいが親父の番頼畧へ入て慈母の死ぬ此小僧の薄命を察しれば傍觀も置れないから二回不足の事ならば來三郎から返しませうとい

云へ爰に持合せた金のないから二人とも氣の毒毒ながら余が家まで来て取引をして下せエ往來中て彼是ど争ふのの不体裁からサア〜小僧も一所来いと万吉安藏二個と誘引家小僧つて安藏に万吉が借たる殘金を濟せ扱万吉の身の上の始終を聞て大さゝ感み安藏が貸たる物のみならず彼方此方の負債を集めて十五六圓の金額を來三郎が拂ふたる其俠氣に安藏の感服して心を改め貸たる金を万吉に返し身の非道なるを後悔して來三郎が教を受け遂に乾兒と成ければ此事よりして來三郎が俠任の名を近村に鳴し水狗半二を憎みし爲も万吉迄を憎みたる溝の口の者共も其人を悪まの聖語と悟り遂に万吉が孤獨あるを憐み物を悪む人多ければ万吉の來三郎の爲も晴天白日は遣ふ心地しつ昨日の困苦に引換て寒氣と飢を知ざるのみか神奈川縣に苦役する父の許へも折々の差入物杯したりし半二の極獄器に在て時疫を患ひ死去せし多年の罪障とや云べし然らば又万吉の彌々來三郎が哀憐を蒙り此人の爲も死んど云義心を忘るゝ時もなく君父の如く仕へたり

○第二十一回

繪と書く雨の姿哉と故人も詠し夕立の晴間を零時松杉の斑み生し辻堂の朽たる椽も裏うち懸し悪漢二個が濡浸りし袖や袂を絞ながら「甚太の何と聞たり知らぬと頃日四ッ谷の權の湯で櫻井静といふ奴を事と托け散々も擲さ令偃て遣らふとした時隣座敷居合せて妨も出張三郎めい大阪の病院で片腕を切落し神奈川縣下へ吟行來て今腕の來三郎といふ名を得て面のよい男達も成たと聞か津守の廓で彼奴の手練も皆怖れてゐる所ゆゑ四ッ谷でいもなく一同其場を逃出した後で委しい容子を聞か彼來三郎の櫻井と昔馴染とかいふ事ではから後れ倦迄も彼方の肩を持と聞たが來三郎も我々を見覚えてゐる様子あるれば銀行の支配人の化の皮も顯れて嬉見櫻へも行きぬ時宜夫の如何でも宜れども堺に住つた破落戸が東京へ來て巨額に金を遣ふ理もなければ彼來三郎が推考て己等が身の上の穿鑿をされた日に旅稼ぎからの追捕が廻つて身軀を失ふ道理あれば遣恨の重る來三郎めを切害して東京を引拂ひがけよ旨く行たふ小豊めを櫻井で逃る積りて有るけれども壁へ片腕落しても一筋縄での中々よ手お遣ぬ來三郎なれば三吉五助の二個を昨夜から來三郎の家廻りに眼張

せ他へ出かける所と狙ひ表口の軒先と垣根と二ヶ所へ二人して火を放つた其上に往來の者の体をして火事だくと呼立れば來三郎が驚いて門口へ出やうとすれど己が軒に火が移れば孝行者の事も又聞ば此節病氣である母を擔いで裏口から飛出すの必定なれば其時足下と己が裏の戸口に持構へ脊負てゐる母諸共ハッサリ切害てまきふ時の骨折りに來三郎の親子を殺して數年以來の怨と晴そのみならず近處の者も女房兒も表口の火は氣をとられて裏口の騒ぎの知らぬ混雜紛れは立退けば我々の面も見認められず後る早く遠國へ出かけて稼が成るといふものナント是等の妙計だふと逸平が胸中と明して語れば甚太の點頭「表の軒へ火を放て裏口は待伏し母を助けて出る所と切害るとの感心した左もあいつの時我々が疲腕にの乗ぬ奴大方るん事たらふと思つた故に佩刀も赤阪御門の堀端の石垣の下から出して風呂敷に包んで來て是で方端都合の好が此夕立で茅家根が濕つて盲く燃ればよいが「イヤ」夫の氣遣おしアレ彼通り西北の晴上つて來たのら煙草四五服喫ふ間よの跡なく晴て未だ是くら二子の渡して越る頃迄暮るもの間もあれ夜の十一二時と成る迄に茅屋の

軒も乾くの必定「ヲ、然いふ間又露て來た人通りの繁くないうち歩行者がら何かの手筈を相談しやうと逸平甚太の尻端折て出てゆく

○第廿壹回

二子川まで一里と聞く世田谷在の往來と少一隔る地藏堂の茅の軒場は白雨の平つよふて涼風を徐よ運ぶ正面は扉を開けて立出る芳吉の四邊を見廻し胸摩下して獨言「賢は網を破るため多宮益まで買物も出かけた歸りの急雨詮方なしは此辻堂で雨舎をする間に親分は身の一大事と聞出したの天の助けと地藏様のお告であらう日頃の御恩に報ふの此時土人でなくての案内知らぬ二子川上流と徒歩渡りに彼奴等二人の先へ廻り然らじやくと點頭て眞一文字は走行さ來三郎が家に到りて息突敢て斯々と告るを聞て來三郎の芳吉が好意を謝し逸平は其計畧あまば此方の敵の奸計に乗らざるを知ら反對て惡黨四人を残り退治て世間の人難と拂ひ枕を高く眠らせんとて先第一の乾兒たる安藏の宅へ赴けて拾余名の乾兒等と密に同家へ招け集へ逸平が素性より埒あつての喧嘩の事また先達て腰の湯にて再會一たる事

故を詞急しく説畢り其宿憤を晴さんとして今夜多勢を語らひ來り家に火を放蕪込と雖も悪巧を万吉が密告したるを僥倖は病中の母と妻子と日の没ぬ間も他へ逃し斯々に計らはんと一々に其手配りを示し來三郎が空屋の周圍に十余人の者を埋伏せざして置りとも勢更えり逸平が手下の三吉五平の二人の其夜も既ふ十二時近く成しころ手拭ひて面を蔽ひ來三郎が家の軒近く進み來りて袂より摺附木と出さんとする折から振足しゆへ背後より窺ひ寄たる安藏と万吉の物をも言はず三吉五助と組止るがら手早く口を手拭ひと喰せて聲と立させず三吉を五助の背に負せ荒繩よて一ツは縋り家の内へ引入て兼て用意貯へ置一枯柴の火を移し安藏と万吉の火事よくと呼りながら二個の手下の大勢よて散々に打擲し裏口の戸を押開き寶巻の如く縛めたる儘五助三吉と突出しければ設待ける逸平と甚太の爰を左より駈寄て扱手も見せせ切て懸れば二個の者の呻とも言はず諸共に血煙り立て驚れたり

○第廿二回

逸平甚太の兩人の闘いのあれど計し如く來三郎を母諸とも確よ切斃し手應に仕合宜と黙頭

合ひ走去んとせし折から來三郎が計略にて裏手の畑の隅々へ積せ置たる枯柴へ一度に火を放け燃たつ籌に五月の闇も白晝の如く四邊を照す火の光は逸平甚太の驚きながら視れば裏の畑の周圍に來三郎の乾兒等數名の各持物を引提て取圍みたる眞先は長劔を引提し來三郎の大音あげ「珍しや大鳥逸平女の事より肉三の遺趣と含みて來三郎と暗討よし家と焼て罪なき家族に至るまで絶さむと謀る大悪人其奸計を洩聞たれば乾兒の安藏万吉五助三太を擒へさせ枯柴は火を放て軒を焼たる体に舉動し暗は紛れて裏口より突出したる三吉五助を向士撃に手に懸し天罰の免れぬ所サア惡びれせよ縛お就き警察の手に渡れど冷笑ひつゝ罵しれば逸平甚太の我が手も懸し三吉五助の死骸を見て互に面と見合せつ呆れて詞もなかりしが疾是迄と思ひしか引提むたる血刀を採直して兩人とも等しく喉咽に突立てアツトばかりよ倒るれば來三郎の馳寄て「天晴流石の泉州にて一端男を傳たいけ斯る時おの未練なく自殺したるの感心あり今若し爰に自殺を遂すば此來三郎も先頃より目と注置たる夜稼ぎの詮議お遭て後々まで賊の汚名を遺すべきは耻を知たる最期こそ大丈夫とも云べきを



れ死骸の檢視を受る後、來三郎の請受て厚く吊ひ得せんと云ふ聲耳に通じて、や逸平甚
 太の頭とわけ謝するが如く手を合せ一度に倒れて絶命せりされ、又溝の口の警察署にて、
 此夜の騒動と聞込て警部の巡查數名を従へ來三郎の家へ出張ありて其訴ふる所を聽き、因
 人の死骸と點檢さるゝに五助三吉の重傷さのら傍伴にして死に至らね、其間、從つて苦し
 き息の下よりも來三郎母子と謀殺せんと巧み却て同士壁へ逢し事より此二個の多年逸平の
 手下と成て強盜を働きたる事落もなく白狀しければ、警察官に置ても此程より四ッ谷最寄
 に兇賊の徘徊する由と以て探索中にて有ければ、唯今三吉五助が白狀、依て逸平の積年の悪
 業判然たりと雖も既に自殺及びたを、其赴きを書面にして裁定と仰ぎ來三郎始め乾見の
 輩の罪を得るべき所なく兇賊を退治て近村の愛ひを除きたる事を詞を以て賞されたり

○第 廿三 回

近村中よ名望ある來三郎が家へ出火ありとも或の賊の入りとも傳へ聞たる百姓等の鑓鐵
 鎌の嫌ひなく農具を携へ馳來つて茅屋の門を市をなし事の仔細を委しく聞て家族の無事を

祝しければ衆くの乾兒の來三郎が家近き精舎へ預けし母お波と女房お政傳次とを迎へに
 行て連歸り恙なきを祝す端に夜の餘波るく明渡りければ同所の戸長野木空右衛門の一樽の
 酒を若者に擔ひせ入來りて恭々しく「委細の事の聞きましたか全く大哥の働きて二子最寄と
 徘徊一衆くの人を悩ませた兇賊と四人まで一度は退治て下されたの近村中の大喜び是ら
 の東京へ出て夜闌て歸る道も安心枕を高く眠られ、其報酬を兼て雇働の見舞い村の豪農
 商中かゝ何か此方へ進せ度と彼是と心配し、乾兒の衆も前晩から骨折の草臥休め酒と
 贈るの宜ふとて一樽持て來ましたの家内一同御無事を祝ひに目出度受納して下されと口
 誼を陳れ、來三郎の「此悪者等の聞れる通り來三郎も遺恨の有て火を放やうとした事なれ
 ば私事の喧嘩から村中を騒がしたお詫を此方でもるべきを賞られるのみならず思ひがけあり
 乾兒迄が御馳走に預るといふ喜も忍入たわけだが折角の思召も承頂いて一同喜びを盡しま
 せうと扱と拂つて蓋と抜き乾兒を始め村方の見舞いのお人も衆ければ燗をするにも間に合ま
 り柄杓を入れて御勝手に澤山飲で下さいとの詞は従ひ大勢の樽を取巻く茶碗酒下物の土地の

名産ある鮎の魚田も搦辛き手前味噌とて乾兒等の來三郎の行ひを只願賀して酔と盡し唄ひ
 の踊りの愉快と極むる折から門へ合乗の挽車を下して先綱と曳たる夫車が腰を屈め「來三
 郎様の此方かぬト問つ、後を見返りて「ライ、此處でござりました、臆で招けば車より
 下たつ男の色白く威有て優しき士族風連の娼妓の他所行と誰が目も見る此二箇の言で
 も看客の御存知成べし

○第廿四回

來三郎の車おて來りし客を夫と見て「貴君の櫻井静様お連の先日鞍の湯で御目よ懸つた娼
 見樓の娼妓と一所に何御用で此遠方へと云を靜の詞急しく「其儘の寛々お話し申す只今二
 子の渡し場で承まひれを昨夜の騒動逸平始め四人迄殺されたとい良い御手柄まづ、御熱
 事て御目出度其喜びお説びと重ねて連て參つた小豊お慈母さんと兄さんお御目よ懸と云
 間も待す小豊のお波に絶り付「お愛慕でござりました吾儕の京都の騒動も別々申すお前
 の女「ヲ、然いへば稚顔お見覺のあるお雪で有たり「コレハ、とばかりお喜三郎と母お

波の共よ小豊の手と探て嬉し涙に三人が暫時詞もあかりしが来三郎の容儀を改め「先日四谷の鞭の湯で面會したと妹と知らぬハ勿々又歸させしが己が妹といふ事と如何して知つてトいふ傍より櫻井静の膝と進め「娼妓も心と奪りての孝養の道にも開け出世の妨だを云る、御異見と實もと悟り委細の容子を小豊お語り手切話一を致さうと昨夜嬉見樓へ参つた上來三郎殿の御深切を話しより一て拙者の實父が紀州よ於て其昔し藥を惠みし縁お因て来三郎殿の互ひの恩人素性の斯々いふ人だと委敷く話せば小豊泣出—夫の吾情の實の兄だと聞て拙者も愕然致して娼妓も成た仔細を聞ハ夫の後でも出来る話し寸刻も早く母と兄の無事な面と見せて呉ると飛立やうな頼みも依て其趣きを内證へ話し一所よ連て来ましたガ委細れ事の本人から御承知なされといふうち母の波の靜お對一實父守村順太夫より受たる昔の謝辭を陳べ有合ふ酒食を饗應ハ小豊の元治の京都の亂は母の背より轉び落しを或旅人お助けられしのが其旅人の拐賣にて母を尋ねて泣居るを欺し賺して叔父と稱させ駿河の府中(今の静岡)の扇屋といふ妓樓へ賣渡され夫より江戸へ住替て近頃吉原へ來りしが解

放の典よの會たれども國を紀州といふ事と兩親の名を知るのとなれば唯神佛を信心し親會ふよの多く人の立入る廓も増す事わらじと今娼妓の出嫁して計らず靜に馴染を重ね末の女夫と盟約して母と兄とよ再會と得たりし始終を物語れば家内の者いふも更なり其座に居合す村中の人々も皆奇遇を感じ再會を賀し喜びて又盃を重ねる端に乾兒の漁夫万吉ハ勝手へ起て鮎切の小刀と探直し吐嗟咽喉へ突立んとするを見るより來三郎の飛懸つて万吉が持たる刃物を奪ひとり「氣が狂つたり是万吉死なふといふハ如何した事だと問れて「ハツと平伏し御免めされと泣出したリ

○第廿五回

面目な氣よ万吉の顔を上て涙を拂ひ「己が親父の水狗半二の親方も御存知の通り長ない事が重つてトウ一獄で死ましたが其召捕れて行く時お探索方お對つて云にハ永年惡事も働らきま—たが元治元年七月の京都の騒ぎに迷子お成され雪といふ兒と引摺ひ東海道と下る序ハ駿府の倡門の扇屋へ賣渡—たハ衆くは中よも惘然だと思つる故如何—てゐるかど其後



ふ同所を通つて余所ながら様子を探らうとした處が扇屋といふ店も代が替つて此頃ていそんな娼婦のゐると云たの積る悪事の百年目神妙な繩と受ますと母と已と暇乞して涙も溢させ行ましたが今小豊さんのお話しに符合するのの親父の所爲大恩と受た親分の御妹子とも知ぬといへば己の親父の恩ある人の妹と賣たと申して生てゐられぬ此方吉親父の罪と身に受て御詫み死あして下さりませと初めて明す親の罪は眞心見ゆる孝子の操と察し遣て來三郎の「親父の詫に死ぬといふ心の定に感心だが昨夜の難を万吉の告てくれぬは來三郎の親子諸共切をるう焼死ぬ所を助つたの汝を平日可愛がつて乾兒よして置たるか其大恩を施せば親父の罪と滅す道理も雪の汝の父半二に拐引されてもお雪の母が汝の爲に助かす罪も報も五分と五分死なふと云ひ狭い了簡親父の罪の帳消祝ひよ最と酒でも過しやト男を研く胸寛き裁判よ一同感心して母子同胞再會の喜び是に増す事なして戸長空右衛門と始として村中爰は打集ひ終日酒宴に佳興を盡して各々家へ歸しより此一談を都鄙へ傳へ來三郎が名の彌々揚りて大哥くと賞されり

○第廿六回

善に善報あり悪は悪報あるや其遲速ありと雖も天は彰々たる疑ふべからず櫻井靜が實の兄守村春雄の病の爲に陸軍を辭し困難して一時の危篤に迫りしも亡父順太夫が往昔恩義を懸し來三郎の妹お雪が苦界の内にて藥料を弟靜に恵み又來三郎に面會してより來三郎が輔を得て療用充分を行届けられ日と追て平癒に及び來三郎同胞が徳に報ふの志探と喜べば來三郎の又妹小豊が前借を償ひ小豊と舊のお雪と稱換へ靜が妻とし我家に住せて順太夫の恩に酬ひ尙守村と櫻井が出世と計る折しもあれ鹿兒島出身の勅任官某公玉川に遊びて鮎を漁る酒宴の間に舟人と接近し召れ「此近在に片腕の來三郎といふ者有て俠任の風と専らとし鬪きを援け強きと挫くの名望ありと聞えしが彼來三郎の紀州の産にて予が亡父の同僚たりし守村順太夫が來三郎の幼少の時の孝必を感じ物を惠みし事ありと亡父が常の語に聞しが其來三郎が西南の役に重傷を負て治療の爲に右の腕を切斷し今此地へ隠遁して先達ても兇賊を挫きしと承まいつたが孝あり勇ある來三郎が行ひに感服され苦しからまば此

舟へ招きて對酌致し度が運て來てい吳まいかトの仰と長み舟人の「それの無うし本人も喜ぶ事とござりませうと急に走て來三郎の家に至り事云々と語りければ願ふてもまさ幸福なりとて某公が舟來り酒食の饗應を蒙りしより某公が歸まる、儘み昔語として慰め任侠の意を賞されて特に懇親を蒙りければ是より邸へ出入もして守村櫻井が一時の困窮を語り官途の周旋と乞しかば某公も亦守村等の事を思ひざるおゝらざれども激務に紛れて疎縁に過し我の過ちに似たりとて幾程もなく守村春雄の故の如くに召出され櫻井静も或省の御用掛を拜命してお雪と中も睦まじく一家親類親みて多年の貧苦を昔語に乏しからざる身と成しも孝貞節義の善報にて花の大哥と立ちたる、梅の浪華小片腕と斷て名を得し來三郎が傳記を擧て童裝婦女子が勸善懲惡の一助となす而已

(大尾)

花兄 譽片腕 終

明治十七年十月二日御届
同 年十二月 出版

〔定價金貳拾五錢〕

編輯人

北豐島郡千束村五百廿二番地
高 畠 藍 泉

出版人

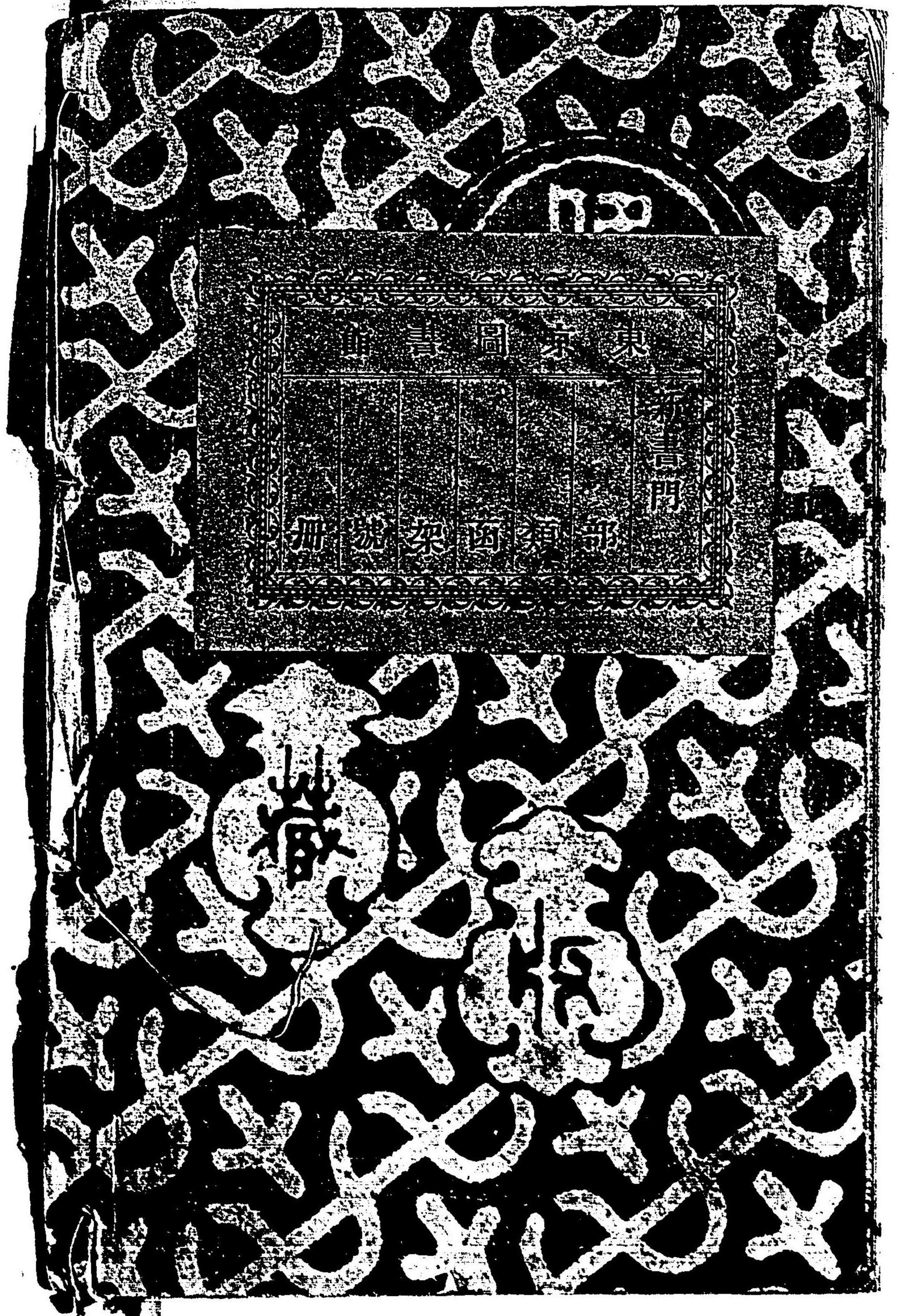
京橋區銀坐貳丁目六番地
千 葉 茂 三 郎

發兌所

東京地本同盟組合之章
共 隆 社

大賣所

東京日本橋區通三丁目	九屋鐵次郎	仙臺大町四丁目	木村文助
同同同同同	金櫻堂	陸前石巻	三陸屋利兵衛
同同同同同	滑稽兵衛	函館末廣町	魁文堂
同同同同同	法木徳兵衛	小田原緑中	石井萬吉
同同同同同	鶴聲文	阿波徳島中通町	阪本平七
同同同同同	辻岡文	靜岡江川町	杉本平
同同同同同	文苑文	備前岡山西大寺町	阿部平
同同同同同	巖々梅	尾州名古屋大曾根坂下	松平兵衛
同同同同同	伊勢屋支店	越後長岡裏一之町	大屋新太
同同同同同	岡島支店	下總千葉町	立倉



1100

東 京 圖 書 館

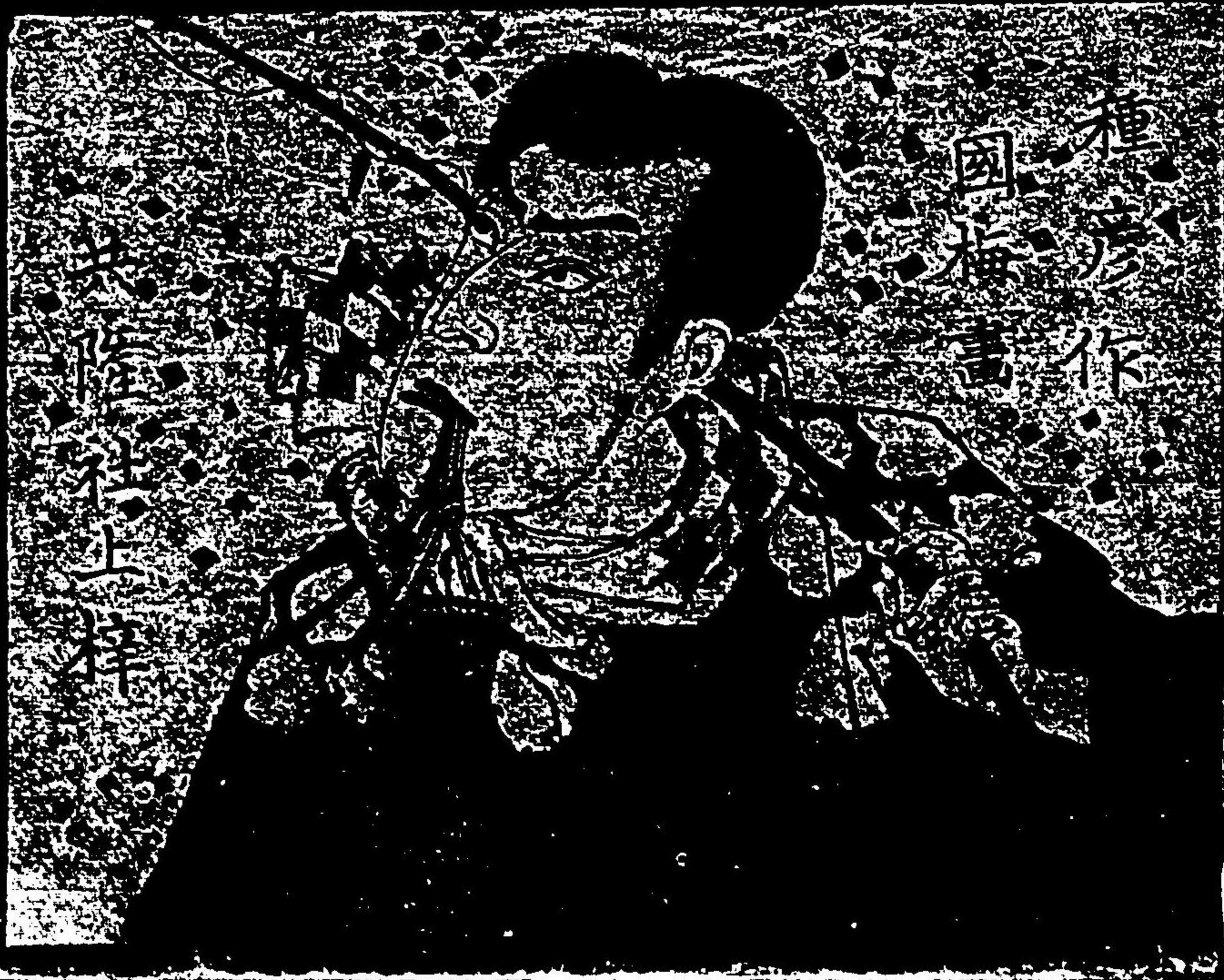
新 書 門

部 類 函 架 號 冊

藏

新 書

特43
58



091264-000-0

特43-58

花兄誉片腕

柳亭 種彦/著

M17

DB.N-2120

